

7月5日 年間第14主日 マタイ11章25～30節 イエスのくびきはなぜ負しやすいのか

これまでイエスは弟子たちを宣教に派遣するにあたっての戒めや勧めについて語られていましたが、11章からは場所を変えて方々の町に行って宣教されます。その最初に獄中の洗礼者ヨハネが弟子を遣わしてイエスがメシアなのかどうかを尋ねさせます。それを受けて群衆にヨハネについて説かれ、さらに悔い改めない町を非難したあとに今日の言葉が語られます。

今日の箇所は前の箇所から見ると唐突のように思われます。しかし、「これらのことを知恵ある者や賢い者には隠し」という言葉が前の箇所とのつながりを表しています。ファリサイ派や律法学者の人々のように、自分たちは賢い、立派だと思ふ人々にイエスの教えは受け入れられず、「幼子のような者」つまり貧しい人や見捨てられている人は神の助けを求め、イエスの教えを喜んで受け入れたということです。それこそ、神の御心にかなうこと、つまり神の願いであったということなのです。

とはいえ、それらの人々は現実の生活で助けを必要としています。そこで「くびき」の話につながります。「くびき」は車へんに厄と書き、厄年や厄介などわざわざを表す字なので、いい意味では使われません。拘束される、抑圧されるという意味で使われます。もともとは頸（くび）に掛ける木というところからきたのでしょう。わたしは「くびき」というと新潟県の頸城地方を思い出します。昔は頸城鉄道という軽便鉄道があり、小さな蒸気機関車が走っていたので有名でした。新潟県の名産品に「くびき牛」がありますが、もちろん「くびきを掛けられた牛」ではなく「頸城地方で育てられた牛」のことです。

しかしなぜくびきを掛けられることが休息になるのでしょうか。さらに重荷を負わせられるんじゃないかと心配になりますね。でも人生の重荷は生きている限り降ろせるものではありません。そこでイエスがやってきて、くびきをかけて一緒に重荷を負ってくださるのです。二頭の牛をしっかりとくびきでつなぎ合わせると、二頭は一体となり、元気な牛の力が疲れている牛に伝わり、楽に曳くことができるのだそうです。

イエスは「柔和で謙遜である」と言われます。自分で言うのが謙遜なのかと思いますが、「柔和」にも「謙遜」にも「小さくされる」「貧しくされる」という意味があるそうです。つまり、イエスご自身が「幼子のような者」であり、だからこそ社会で苦しみを受けている人々に共感し、寄り添ってくださるのです。

この世の人生には、水戸黄門の歌ではありませんが、楽しみもあれば苦しみもあります。「わたしの人生は苦しみばかりです」という人もいらっしゃることでしょう。そのような人生の重荷を負いきることができるように、イエスはくびきを負ってくださいます。そしてイエスの弟子であるわたしたちは、苦しみを負っている人々とともに歩むことによって、この世に神の御心を実現することができるのです。

(柳本神父)